

時代と対話する1時間

one hour



[表紙] 匠の結晶

2015年度グッドデザイン賞受賞 tipo



注目の企業に学ぶ

鎌田段ボール工業株式会社



カルテの余白

ニューハート・ワタナベ国際病院総長 渡邊 剛



活キル字ハ語ル

『家族連写』森 浩美著



美味伝心

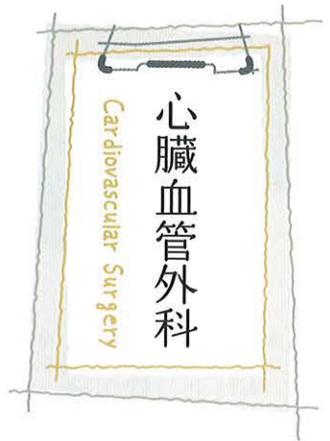
「惑星シヨコラ」



一問一答経営塾

「事業支援に関する
様々な支援策」





カルテの余白 渡邊 剛

一人でも多くの患者に、世界レベルの手術を

世界でも最高レベルの手術実績を誇るニューヨーク・ウタナベ国際病院。一昨年5月の開院からわずか1年半で手術件数635件(うち心臓手術436件)、心臓手術の成功率は99.8%(15年11月末時点)という驚異的な数字を実現した人物が、同院を率いる心臓血管外科医・渡邊剛医師だ。

「確かに成績は日本一だと思いますが、病院経営という意味で成功かどうかは、まだ分かりません。どんなに成績が良くても、合併症を起こさず、早く退院させる技術があるほど、診療報酬は低くなり経営的には厳しくなるというジレンマをはらんでいるのです。メ

ディアに取り上げていただいたり、ホームページで様々な情報公開をしています。素晴らしい手術をすることにより多くの方々に知ってもらい、患者さまに来ていただきたいと思っています」

渡邊医師は、32歳で日本人最年少の心臓移植執刀医となった。日本で初めて「オフポンプ手術(人工心臓を使わず、心臓を拍動させたまま行なう手術)」を成功。99年には世界で初めて内視鏡を用いた冠動脈バイパス手術を成功させる。次々と成功実績を積み重ねていく渡邊医師を、いつしか周囲は「天才心臓外科医」と称するようになって



いた。そして'05年。渡邊医師は外科手術用ロボット『ダ・ヴィンチ』を導入し、日本

人初のロボット心臓手術を行なう。「初めてダ・ヴィンチを

見たとき、この機械は医療の歴史を変えるだろうと直感しました。とはいえ、新しい治療法は怖い。失敗したくないからです。背中を押してくれたのは、師であるボラスト先生の教えでした。『新しい術式へのチャレンジは一万例の手術よりも崇高である。新しい術式の開発には真の価値があるのだ』と

「彼の言葉が、私を未知の領域に立ち向かわせてくれたのです」

現在、ダ・ヴィンチは日本に200台ほどあるが、本格的に心臓手術に応用している施設はニューヨーク・ウタナベ国際病院のみだという。ロボット手術は骨を切ることもなく、術中の出血も少なく、術後の痛みも軽く、ほとんど痕跡が残らないため美容的にも優れている。また、既存の術式と比べて、入院期間は大幅に短縮され、早期の社会復帰が可能となる。にもかかわらず、他の施設が心臓手術に用いない理由は明解だ。ダ・ヴィンチを使いこなせる医師がおらず、育てられていないのだ。

「日本には『大学病院信奉』ともいえる意識が根強くありますが、それは間違いです。もちろん、素晴らしい医療を提供しているチームも数多くあります。しかし大学病院では、手術室や検査機器を多くの科で共有していますから、医療の専門性を高めていくことは実際には難しいのです」

渡邊医師が自らの手で病院を立ち上げた理由もそこにある。



「皆さん意外に思われるかもしれませんが、世界の先進的な医療水

準と比べて『日本の医療は進んでいる』とは決して言えません。こと心臓外科においては遅れています。世界と肩を並べられる心臓専門の施設を作らなくては、という危機感もあってこの病院を作りました。本来なら救えるはずの命が、技術の遅れから救えないのだとすれば、それは医師の怠慢としかいえません。私は一人でも多くの患者さまに、世界レベルの心臓手術を提供したいのです」

渡邊医師は高度な機械を見事に使いこなす『神の手』の持ち主であるのだが、そこに誇りはない。患

者が安心して手術台に向かえるように創意工夫を凝らし、病院経営に新たな試みを取り入れている。手術室を文字通り『ガラス張り』にした取り組みもその一つだ。

「手術室の中では、様々な人間が目まぐるしく動き回っています。外科医だけでなく、麻酔科医や人工心臓士、ナース、いろんな立場の人間がそれぞれの持ち場で患者さまのために必死に闘っている姿を見てほしい。それは患者さまやご家族に対する、どんな数字よりも真摯な『情報公開』だと思っております」

患者や家族とのコミュニケーションにも驚くほど多くの時間を割く。入院前、手術前、ことあることに時間を作っては不安の声に耳を傾け、納得するまでじつくりと説

明する。インフォームド・コンセント（患者が医師から治療法などを十分に知らされたうえで同意すること）は、手術に劣らず大切で難しいという。

「外科医の優劣を計る物差しは、手術の速さや腕だけではありません。技術はもとより、全てにおいてプロフェッショナルであること。患者さまとの会話や説明の仕方も含めて、全てにおいてプロであるべきだと思います。私自身も、ドイツにいた若い頃は『手術の早さ』に生きがいを感じていました。けれどある時期から、そんな『幼稚』なことでは威張ったり、自己満足してはいけません。自分の腕に溺れる職人であってはいけません。技術

だけでなく、そこに魂を込めて初めて医者になるのだと。自分の魂を削つても患者さまを助けたいと思えない医者、手術数や成功実績を高言するだけの医者に、私はなりたくありません」

渡邊医師の病院には、患者への『3つの約束』がある。日本では受けられる中でベストの治療を提供すること。自分の家族を思うように、患者のことを思い、治療にあたること。そして、必ず『元気』になって帰っていただくこと。そのような重い言葉を掲げて病院を運営し、後進を育成し、自らも執刀する渡邊医師に休息はない。「患者さんが元気になつて退院していく後姿を見るときが、安堵を覚える唯一の時間ですね」



photo: Daiki Sekimizu

医療法人社団東京医心会
ニューハート・ワタナベ国際病院総長

渡邊 剛 Go Watanabe

1984年、金沢大学医学部を卒業後、ドイツ・ハノーファー医科大学心臓血管外科に留学し、心臓外科の父と呼ばれるハンス・ボルスト教授に師事する。帰国後、金沢大学附属病院、富山医科薬科大学医学部助教授、金沢大学医学部外科学第一講座主任教授を経て、2005年に東京医科大学心臓外科教授（兼任）に就任。'11年からは国際医療福祉大学客員教授、日本学術振興会専門研究員、帝京大学心臓外科客員教授を歴任し、'14年5月、ニューハート・ワタナベ国際病院を設立する。日本ロボット外科学会理事長、日伯研究者協会副会長も務める。また、長年にわたる国際医療支援が評価され「平成27年度外務大臣表彰」を授与される。著書に『医者になる人を知っておきたいこと』（PHP新書）等、評伝に『稚拙なる者は去れ』（講談社・細井勝著）がある。

【Webサイト】<http://newheart.jp/>

ダ・ヴィンチを用いる心臓手術は自由診療になりますが、肉体的にも精神的にも負担が少ないことから、約6人に1人の患者がロボット手術を選択しているそうです。

